

幼児の個性を伸ばすために

平井信義



個性を伸ばす——何というよい言葉でしょう。そこには、子どもの持っている能力やその他の持ち味を、その極限まで伸ばしてあげようという教育の目標が示されています。このような教育を受けて育った子どもは、どんなに幸せなことでしょう。

この世に生まれた甲斐を、じゅうぶんに汲みとることができるところです。ルソーは、「一個の人間」という言葉を使って、そのことを表現しました。ルソーのみでなく、子どもの教育にたずさわる人たちのほとんどが、この個性を伸ばすことを考えたのも、当然なことだと思います。今日もなお、保育者の多くが、このことを願っていると思います。

ところで、「個性」とはいったい何を意味するのでしょうか。「個性」を伸ばすためには、その個性が何かを考え、それを見

抜くことが必要となります。目の前にいる子どもについて、そのことを実際に実現しなければなりません。その上で、個性を伸ばすためにはどのようにしたらよいか、その方法を見出さなければならぬのです。

毎日の保育の中で、子どもの個性を伸ばす営みがどのように行なわれているか、もう一度振り返ってみて下さい。一人一人の子どもの個性を、どのように把握して、どのように伸ばしてきたかを……。じっと目をつぶって、今日一日の保育の中で、どのような営みをしてきたかを……。

それと同時に、保育者自身が自分の個性をどのように認めてきたか、それが伸びてきたか、伸ばされるような環境にあったかを、振り返ってみていただきたいと思います。自分自身の個性を見出すことができないでは、子どもたちの個性を見出すこ

とはさらにむずかしい——という言葉が口をついてでてはきませんが、自分自身の個性が何かをいうことは、決してやさしいことではないと思います。うっかりすると、個性と思っていることが、いじな自分の姿であったり、異常なかたよりであったりする場合もあるのです。それにうぬぼれてしまったり、他人に迷惑のかかるようなことになったら大へんです。むしろ「自分には、とり立てて、個性というほどのものはない」とお答えになる方が多いのではないか、とも思われるのです。

いったい、「個性」とは、何を指しているのでしょうか。それを固い言葉で表現するならば、その人間を他の人間から区別することのできるような、その人間の独自の特性を意味するといえるでしょう。人間には、いろいろな能力があります。それは、精神についてもいえますし、身体についてもいえます。更にそれらを細かく分けて考えた時、精神についてはその人間の知的能力があがってくるでしょうし、性格をあげることもできます。身体については、身長や体重などの体位を考慮することもできますし、体力や体質などを念頭におくことができます。確かに、それらには、一人一人のちがいが見出されるでしょう。つまり、精神上からみても、身体上からみても、その特性は、量的にあるいは質的にちがいがあがることは、誰し

も認めるところです。

しかし、そうした個人個人のちがいが、そのまま、「個性」といえるでしょうか。個々の人間のちがいは、差を示すものではあっても、それがそのまま人間の「個性」とはならないことは、おわかりになると思います。特に個人差は、その人間がおかれていた環境によって作りだされる面が大きく、例えば悪い環境の中で育てられた場合には、他の人間から区別できるような特性があっても、それを「個性」とはいえないと思います。

そのように考えますと、個性とはその人間のよい面を指していることになりましょうし、ある意味では先天的に（生まれつき）備っているよい面——ということにもなりましょう。ある場合には、かくされていて未だじゅうぶんに發揮されていないよい面をさがしだすことが、個性を伸ばすということに通ずることにもなりましょう。

これまでも、個性を伸ばすという言葉が用いられる時、その人間の天分を発見して、それが伸びるように環境を調整するという意味でいわれることが多かったと思います。そうなる、極端にいえば、音楽の才能があるかどうかを早くから試してみても、その面で伸びる力がありそうかどうかという時には、よい先生につけて、その才能を伸ばし、音楽家として一家をなすようにす

ることが、個性を伸ばすということになりそうです。いわば、天才教育とか才能教育ということになりそうです。

あるいは、知能の遅れている子どもについては、それなりに、何かその子どもの特性を見出して、それを伸ばすように教育していくということが、個性を伸ばすという意味に使われることがあります。はたして、それを、個性を伸ばすということと同じに考えてよいのでしょうか。

一方では、その子どもの性格について、個性ということが問題になることがあります。そうした性格を問題にする場合、生まれつきの性格を考える人もありますし、生後に形成された性格、あるいはその二つが入り組んででき上った、いわゆる人格（パーソナリティ）を指していることもあります。しかし、それらを直ちに「個性」といつてしまってもよいものかどうか。

このように考えてきますと、これまで「個性を伸ばす」という言葉で「個性」を考えていたものが、案外、あいまいであつたことに気付かれたことと思いますし、軽々しく「個性」などということとはできないことに思い当られたと思います。

では、「個性」とは何なのでしょう。特に、幼児の「個性」という場合に、何を指していったらよいのでしょうか。抽象的な

いい方をすれば、個々の子どもの中にあるいろいろな特性のどれかをとらえて個性というのではない。それらの特性がはなればなれでなく、統一されてその子どもに存在し、しかも、それがかけがえのない持ち味を発揮する場合、それを「個性」といふべきだと考えている学者が多いのです。つまり、一つ一つの才能とか能力を取り出して、それを「個性」ということはできない——という考え方がそこにあるのです。そこに、個性を認めることのむずかしさがあるのです。個性を伸ばす——ということがいかにすばらしいことであるかについてはわかっています、それを毎日の実践の中で実現することのむずかしさは、ここにあるのです。

これまで、個性を伸ばすために、どのような教育が行なわれてきたか。それを検討しながら、「個性」というものを考えてみましょう。

その一つに、個別指導法があります。一斉指導では個性を發揮させる点で弱いので、子どもひとりひとりを対象として指導しようという考え方です。その方法としては、一定の内容を子どもの能力に応じて速度を早め、進級させていく方法や、プログラムを作って子どもに与え、その子どものペースで行動や学習をさせる方法、あるいは、能力別にクラスを編成し、その能力に応じて内容をかえる方法です。いわゆるプログラム学習と

か、あるいは分団学習といわれているものは、個性を伸ばすことに教育の目的をおいていることは、どなたもご存じのことだと思います。

しかし、その際にも、いくつかの問題がでてきます。その一つは、個々の子どもを大切にすることは、子どもは友だちとの関係の中で伸びていくという点を、どのように考えるか。個性を尊重しながらも、社会の一員として、すなわち全体の中の個人として考え行動できる子どもにするには、どのような教育をしたらよいかという問題があります。また、「個性」が知的能力だけに偏り、他の面が忘れられれば、その子どもの他の特性を見失うことになり、その子どもの全体としての「個性」を伸ばすことにはならないでしょう。また、子どもにどのような教材を与え、どのように行動の指示を与えるか——ということになると、そのプログラムを作るのは容易なことではありません。その際にも、「個性」を発見することがなかなかむずかしい——という問題は、相変わらず残っています。このような教育の方法をとってみても、その効果はたしてあがったかどうかの検討も、軽々しくはできません。

これまで行なわれた「個性を伸ばす」方法について考えてみても、理想としてはよいことでありながら、現実にはむずかし

い問題をたくさんに含んでいることがわかります。

もう一度、「個性」とは何かの問題に帰って、考えてみましょう。その際に、その子どもの個々の特性、例えば、知的能力であるとか、性格傾向、社会性、体位や体力などを並べてみることができません。それについて、また、細かい点を分析することができましょう。知的能力にしても、知能テストの結果だけでなく、課題を与えられた時の反応の速さとか反応の仕方をおげることができずし、知能をいろいろの要素に分けて検討することも行なわれています。それらにも、子どもによって特性があることを見出すでしょう。そればかりではありません。本来は高い知的能力を持ちながら、それがじゅうぶんに発揮できないような状態にある子どももいます。ですから、その点での鑑別眼も必要となります。例えば、情緒的に苦しい思いをしている子どもや、情緒が閉塞している子どもは、じゅうぶんに知的能力をもちながらそれを発揮できないことがあるのです。そうになると、情緒を正常に発達させた上でなくては、知的能力の特性をきっちり理解できないということになります。あるいは、耳が遠いか目が弱い（弱視）とかのために、知的能力がはっきりと理解できないということも実際に起きています。

性格の問題となると、なお問題は複雑です。引込思案の子ど

もがいても、それがその子どもの特性（持ち味）であるのか、あるいは両親の養育態度がそのような特性を子どもに与えてしまっているのか、簡単にいえないようなことを、絶えず経験されていることと思います。

積極的な子どもとか消極的な子ども——といっても、同様にその子どもの特性であるのか、家庭環境によって形成されたものか、そのままでよいのか、なおしてあげなければならぬ特性なのか……同じことが、体位とか体力の特性についてもいえるでしょう。痩せていたり、小さいことがその子の特性なのか、あるいは栄養の与え方に欠陥があつてのことか、判断に迷うことが少なくありません。

しかも、一人一人の子どもが持っているいろいろな特性を全体として理解する必要があります。個々の特性が全体として理解されて、初めて「個性」ということになるわけです。しかし、その際にも、全体として——ということをもどのように考えたらいかがが問題になってくるのです。いろいろな特性を並べただけでは、「個性」とはいいがたいのです。いろいろな特性を貫いている特徴をとらえるとか、それらの特性を包括して特徴となるものをあげるとか、——あるいは、それだけでは「個性」を理解することには、まだまだ及ばないという感じがします。

「個性」を理解する——ということとは、実にむずかしい。し

かも、子どもには発達という現象があります。刻々と自己をかえながら上昇していきます。また、環境や教育によっていろいろに変わっていく可能性もっています。それだけに、これがこの子どもの「個性」であるということとは、なかなかむずかしいし、「個性」を伸ばすために行なつた個別指導の結果、「個性」が発揮されたかどうかの判定についても、自信をもつていうことがなかなかできないのです。

このように考えますと、子どもには（あるいは人間には）まだまだたくさん可能性を秘めているということができましよう。子どもたちがお互いに啓発し合つて、その可能性を發揮させることもありましようし、保育者の指導が、よい効果をおさめることもあり得るでしょう。そのための場を与えるとともに、絶えず、その方法を探索していることが必要になるはずす。

しかし、子どもの「個性」の発見の方法と、その指導の方法とを結びつける理論は、まだほとんど見出されていないといつてもよいでしょう。それだけに、子どもには、限らない「可能性」が秘められているといえましよう。無限の可能性をもつている存在——それが、子どもなのです。

（お茶の水女子大学）